

策彦紹巴両吟和漢千句（国会図書館本） 翻刻と解題

楊 昆鵬
中村 健史

ここに紹介するのは、策彦周良と紹巴による両吟の和漢千句である。

和漢千句は、和漢・漢和百韻を数日掛けて十作（追加も含む）連続で行う形式であり、室町時代から江戸初期にかけて、以下十種の作品が現存する。

- ① 文明十六年（一四八四）二月二十三日〜終了日不詳 禁裏和漢千句
- ② 天文二十三年（一五五四）十月三日〜終了日不詳 称名院和漢千句
- ③ 天文二十四年（一五五五）三月二十五日〜二十七日 太神宮法楽和漢千句
- ④ 弘治二年（一五五六）八月二十一日〜二十三日 大覚寺和漢千句
- ⑤ 年次未詳 策彦紹巴両吟和漢千句（本作）
- ⑥ 天正十九年（一五九二）四月二十一日〜二十三日 禁裏和漢千句
- ⑦ 天正十九年（一五九二）五月二十七日〜翌年五月一日 素然永雄両吟和漢千句

⑧ 文禄二年（一五九三）四月二十日〜二十二日 禁裏和漢千句

⑨ 慶長九年（一六〇四）九月三日〜五日 禁裏和漢千句

⑩ 寛永十三年（一六三六）五月十三日〜十五日 仙洞和漢千句

①については本号小山順子氏『文明十六年二月和漢千句』考——付、第五百韻・三つ物翻刻——を参照されたい。③④⑥⑦は『室町後期和漢聯句作品集成』（臨川書店、二〇一〇）に、⑨は本誌第二十五号（二〇一一・三）に楊・中村の紹介がある。なお、②と⑧は曼殊院蔵本、⑩は国立国会図書館『連歌合集』に収められており、近い将来紹介されることを期待したい。

さて、⑤本作の張行年次は不詳であるが、策彦が初めて和漢聯句に出席したと考えられる④弘治二年（一五五六）から、没年の天正七年（一五七九）までの成立と推測される。加えて永禄十一年（一五六八）十二月に策彦紹巴両吟和漢百韻が、翌五月に同じく両吟の漢和百韻が詠まれる（『俳文学大辞典』）ことに注意すれば、深沢真二氏の推測されるように永禄十一年（一五六八）頃の成立と考えるのがもっとも自然であろう（『和漢』

の世界——和漢聯句の基礎的研究——『清文堂、二〇一〇』。

策彦周良は、文龜元年（一五〇一）に生まれ、天正七年（一五七九）年に没した戦国時代の禅僧で、詩文にすぐれ、また中国との外交にも功績を挙げたことで知られる。永正六年（一五〇九）に京都鹿苑寺で仏門に入り、経書や『三体詩』『古文真宝』などを広く誦習し、幼少ながら詩文の才能をあらわした。大永二年（一五二二）に天龍寺妙智院の住職となり、天文六年（一五三七）と同十六年、二度にわたって入明使節として進貢貿易に活躍した。その記録として『策彦和尚入明記初渡集』と『再渡集』がある。明の世宗に謁見したことや大官文士との交流などを支えたのが、策彦の高度な漢詩文能力であったことは言うまでもないが、北京や寧波での体験はまた彼の文学に大きな動力と自信を与えたに違いない。

なかんずく策彦の文芸活動としては、入明の際にも携えていたという、江心承董との共作『城西聯句』（弘治二年跋、『九千句』とも）や梅谷元保との『三千句』（天正六年跋）など、聯句の多作が五山文学全体から見ても突出している。『言継卿記』や伝存する作品などを見る限り、策彦が和漢聯句の席に列したのは天文二十三年（一五五四）一月二十九日禁裏聖天法楽和漢聯句（曼殊院蔵）が最初で、紹巴とは前掲④弘治二年（一五五六）八月大覚寺和漢千句で初めて同座した。

連歌師紹巴は大永四年（一五二四）または五年生まれ、慶長七年（一六〇二）没。連歌、和歌を里村昌休、三条西公条らに学び、天文二十一年（一五五二）に昌休が没して以降は、その子昌叱を養育して里村家を後見した。文祿四年（一五九五）豊

臣秀次に連座して流罪。慶長二年（一五九七）に罪を許されるが、数年にして没した。谷宗養と並ぶ織豊期連歌界の指導者で、『連歌至宝抄』『源氏物語紹巴抄』などの著述がある。

現存する紹巴の連歌作品は、天文十九年（一五五〇）以降のものが多く、最初に和漢聯句に名前が見られるのは②天文二十三年（一五五四）十月三日称名院和漢千句である（『連歌総目録』）。連歌師として修行しながら、称名院三条西実条や近衛植家、山科言継など公家と交渉を重ね、次第に和漢聯句に習熟していったものである。紹巴が策彦と一座した作品としては、前掲④弘治二年八月大覚寺和漢千句以降、次のようなものがある。

イ 永祿七年（一五六四）二月二日和漢百韻

ロ 永祿九年九月十日和漢百韻

ハ 永祿十一年十二月二十五日和漢百韻（両吟）

ニ 永祿十二年四月九日和漢百韻

ホ 永祿十二年五月十三日和漢百韻（両吟）

ヘ 永祿十三年二月十四日和漢百韻

ト 永祿十三年六月十二日和漢百韻

チ 元龜元年（一五七〇）六月十二日和漢百韻

リ 元龜二年四月十六日和漢百韻

ヌ 天正三年（一五七五）十一月二十五日和漢百韻

ル 天正六年九月二十五日和漢百韻

ヲ 年次不詳漢和百韻（発句「心満初弦月」）

ワ 年次不詳漢和百韻（発句「涼盛夏天賜」）

このうち、前述の通り、ハとホが両吟の作品である。なお、ハの永祿十一年（一五六八）十二月二十五日和漢百韻は、夢想句を発句として二人で唱和したものである（一）。

和漢聯句の創作が盛んになりつつある当時であつて、二人が同座した機会は決して多いとは言いがたいものの、両吟の和漢・漢を試み、それが千句に及んだことは、互いの技量を認め合つていたゆえであらう。なお、両者の交流については、中本大氏「天文・永祿年間の雅交——仁如集堯・策彦周良・紹巴そして聖護院道澄——」（『古代中世文学研究論集 第二集』和泉書院、一九九）に詳述されているので、あわせて参照されたい。同論で中本氏も引いておられるように、策彦にとつて紹巴は「廻以連歌之道。名鳴当世者也」（『謙斎藁』）であつた。本作の背景には、こうした信頼関係に基づく二人の雅交があつた。

言うまでもないことであるが、千句の興行には作者の高い技量が必要であり、百韻と比べると数倍もの氣力が求められよう。まして両吟千句となればなおさらである。本作以前の和漢千句はいずれも大がかりで晴れやかな雅筵であつたが、策彦と紹巴はここで初めての個人的な千句興行に挑戦したのであつた。なかでも、現存する和漢聯句のうち、本作がもっとも古い両吟千句であることは大きな意義を持つであらう。

具体的にどのような経緯で本作が張行されたのか、またどれほどの期間で完成したかは不明であるが、稿者はこれを和漢聯句創作の稽古を目的とするものではなかつたかと考える。それはまず、百韻十巻のうち、和句側と漢句側の比重にうかがうことができる。本作以前の和漢千句①②③④において、漢句を発句とする百韻すなわち漢和聯句はそれぞれ、①なし、②四巻、③二巻（このほか追加八句も漢和聯句）、④三巻である。それに対して、本作は漢和聯句が五巻も占め、和漢聯句^(三)と拮抗して

いる。

和漢聯句とは異なり、漢和聯句の場合は、和句、漢句にかかわらず、すべての偶数句で押韻が求められる。和句であっても、句末の自立語は漢字で韻を踏む必要があり、韻字や漢詩文に関する高度な素養が必要となる（したがって、制作にあたっては、策彦が紹巴に助言を与える場面も少なくなかつたであらう）。当然その制作には困難がともなうため、千句の半数が漢和聯句の賦物を取るのとは異例のことであり、両吟という私的な性格を考えあわせれば、稽古としての側面が強かつたのではないかと想像されるのである。ちなみに、後の⑦天正十九年五月素然永雄両吟和漢千句も、和漢聯句五巻、漢和聯句が五巻である点は本作と共通しており、中断をはさんで二年間かけて完成したのも、やはり練習としての性格があつたからである。

次に、発句の季の問題が考えられる。本作では、第一百韻から順に、春、春、春、夏、秋、秋、冬、冬と、所謂「四季発句」の形式が取られている。連歌千句では早くから行われたものであるが、天文から天正年間にかけては、連歌千句、和漢千句ともに、当座の季で十巻を統一するのが一般的であつた。そうしたなか、紹巴は永祿六年（一五六三）十二月の称名院追善独吟千句において四季発句を用いている。本作ではその経験を生かしたものだと思われ、和漢千句における四季発句の初例として重要な意味を持つ（本作より後の例では、⑧と⑩が四季発句である）。また、当座の季にこだわらなかつたのはやはり稽古の意識があつたためであらう。

最後に付言すれば、本作第一百韻の発句「鷗梅香四海（鷗梅四海に香る）」に見える「鷗梅」という語は、和漢聯句や聯句の

用例がほとんど見られず、中国漢詩文の熟語でもない。ただし、江心承董の漢詩^③には用例が多数見出される。どうやら、鴟のような白い梅という意味合いで、江心が独創し、愛用した言葉と思われる。『城西聯句』などで長らく江心と聯句の詠作をともにした策彦は、雅友独自の詩語を発句に飾っていたのではなかったか、と想像してやまない。このように五山文学の代表詩人であり、ことに禅林聯句最大の作者でもあった策彦周良、そして当時連歌の第一人者たる紹巴の手に成った本作には、興味深い問題が数多く含まれると考えられる。その詳細については、なお今後の課題としたい。

『連歌総目録』によれば、本作は天理図書館に二種（れ六一七、れ六一二）、国会図書館に二種（『連歌合集』第十四冊、第二十一冊）の伝本が所蔵される。今回は国会図書館蔵『連歌合集』第二十一冊を底本として翻刻し、同第十四冊をもつて校異を行った。

『連歌合集』の書誌は以下の通りである。「室町末期―江戸末期写」「もともとこの叢書は六十一冊であるが、うち第一から第十までは、貴重書として指定され（昭和四四年二月）、第十一冊以降は、一般書として別配架されている（請求記号わ九一・二一）」「この合集本は、それぞれ独立した句集、論集、式目などの集成なので、書写の時代、形式、大きさ等、それぞれに異質のものを合綴し叢書として編成されているものであるから、各冊の形態はかならずしも一様ではない」（『国立国会図書館所蔵貴重書解題』第九卷）。国立国会図書館蔵書検索・申込システムの書誌情報によれば、第二十一冊は写本一冊、和装本、

一四×二二cm、とのことである。

翻刻にあたっては、百韻ごとの句番号を算用数字で示した。字体は原則として現在通行のものに統一し、私意によって濁点を補った。また、底本の付訓はすべて省略した。誤写と思われる部分には、なるべく（某力）のかたちで傍記を施すようにした。

作業の分担は、第一から第五までを楊が、第六から第十までを中村が翻刻し、解題については楊が単独で執筆した。また、本稿を成すにあたり、山本真由子氏は全体を通覧され、いくつかの有益な意見を寄せられた。これによって誤りを正した例も少なくない。記して学恩に謝する次第である。

〔注〕

（一）張行日から考えると、発句は北野（天神）の夢想句であろう。

なお、この夢想百韻については『連歌総目録』に伝本十二種を紹介するが、そのほか京都女子大学にも『夢想之倭漢 紹巴・策彦 両吟』と題する一本が蔵される（今春、同図書館分館特別展示「和漢朗詠と和漢聯句」に出品）。諸本中きわだって良質な本文を有しており、作品の成立を考えるうえで注目される（京都女子大学本については、主として大谷俊太氏のご示教による）。

（二）ここでは、狭義の和漢聯句、すなわち和句を発句とする聯句連歌を指す。和漢聯句では、押韻は偶数句が漢句である場合にかぎられる。

（三）『翰林五鳳集』には「白鷗梅」の題で江心の詩が六首採られている（江心のほかには熙春龍喜の一首のみ）。

【翻刻】

《一》

策彦紹巴 両吟

千句第一

漢和

- 1 鷗梅香四海
- 2 空にのどけき浦風ぞ吹
- 3 波の上も朧に春の月落て
- 4 雲収景始奇
- 5 簾間山画軸
- 6 軒端の竹の葉のそよぐ時
- 7 村時雨門田の面に音信て
- 8 帰則路参差
- 9 苔自無根草
- 10 あつさを水のさそひてぞ之
- 11 秋来ぬとほそき流の声たてゝ
- 12 深溪月較遅
- 13 錦心楓坐愛
- 14 そことも分ずたどるみち芝
- 15 かり衣ひも夕暮の宿問て
- 16 故郷天一涯
- 17 難波江や立帰る浪のをと計

- 18 鐘聞し夜も明ぞ離る
- 19 孤淚湿双袖
- 20 多情弹要琵琶
- 21 春閨花約処
- 22 馴るゝや同じ園の黄鸝
- 23 面影は去年の儘なる野べの雪
- 24 風定凍雲垂
- 25 佳境瀑千仞
- 26 要津州九支
- 27 入来てもまたたづきなき都にて
- 28 うしやいもせのかはる衰へ
- 29 夢回吾在此
- 30 月にあらしの枕敬ッ
- 31 秋の葉や偽る雨の声ならし
- 32 時哉后土祠
- 33 長流横古路
- 34 たゞ一筋の橋は危シ
- 35 暮れ行尾上に棘の引すてゝ
- 36 雲片掩峨岬
- 37 斜照年光切
- 38 いはけなき身もあはれをや知ル
- 39 忘なよ我も馴にし真木柱
- 40 愁胸霧未披
- 41 独分明是月
- 42 浪冷しくよするから崎
- 43 山風のまに／＼花のふゞき来て

44 惜春皺断眉
 45 数くの歌の席の永日に
 46 袖をつらぬる百敷の堀
 47 掃之塵幾度^{幾カ}
 48 論は世何為
 49 あだ人としれば恨も深からで
 50 離襟奈久咨
 51 圓然村一笛
 52 いさりの舟のとをき夕滴
 53 引塩に浜の真砂地あらはれて
 54 同胞双鷺^鷺
 55 声無蹤乍雨
 56 ふりさけみれば嶺の自由其
 57 入方は茂りにくらし宇治の山
 58 絶妙古人詩
 59 吟落西欄月
 60 たゝむ袖のつゆは滋
 61 莎鷄声当午
 62 檀特仏生黄^黄
 63 二月や消て空しきうす霞
 64 帰るさ寒き野路の春颺
 65 水こぼる沢辺の若菜摘侘て
 66 紅会使花期
 67 頻涙今臨別
 68 懶生夕寄思
 69 問来んはかならずいつの夜半ならん

70 月にもうとし山子規
 71 天の戸の明ぼの残る雲ちりて
 72 帰帆如可追
 73 竹江灘八節
 74 漸暮わたる遠の川崖
 75 爾屋烟輕颺
 76 山路をひとり行人は誰^ッ
 77 棧の霜ふみ初し跡見えて
 78 離変難免譬
 79 堪てうき思ひやかたり出つらん
 80 今はのきはとなれる悲^サ
 81 そぎおろす面影おしき黒髪に
 82 可羞樵悴姿
 83 帰雲何処去
 84 歴劫已陰移
 85 朽木遊仙枕
 86 すゑは岩ほにかゝる松が枝
 87 ほの白き水上さぞな瀧津浪
 88 許由禁耳溜
 89 清心無若月
 90 ふけて碓の又ひびき来^又
 91 さらでだにつらき旅ねの秋の風
 92 柴扉敲^与推
 93 余閑人^{非カ}昇几
 94 見るにかたよる青柳の糸
 95 下水の煙にもるゝ花咲て

96 蛙声只半池
97 小田返す塘の辺暮残り
98 擊壤牧童児
99 漢祖居高位
100 末までたもつ世こそ治れ

《二》

倭漢 第二

1 青柳に眠をゆづる胡蝶哉
2 芳聯桃李園
3 断霞春欲去
4 水のほとりの暮残るかげ
5 岩たゝむ上より白き瀧落て
6 風露玉輕翻
7 夜画紗窓月
8 秋の螢のかすかなるには
9 木がくれの所ぐは草朽て
10 苔厚履無痕
11 雲簇溪橋遠
12 ひゞきも雨をさそふやま水
13 立出て夏を忘るゝ松の戸に
14 日斜更断魂
15 けふこずはいかに残らん花盛
16 和霞先賞樽

17 乱啼鶯百轉
18 漫説貝千言
19 私照孤閨月
20 おどろく夢の床は冷し
21 声きけば秋も更行小夜嵐
22 関路をこえん須磨のうら浪
23 身舟何岸寄
24 健筆自虹噴
25 しゝめの嶺はるぐと雲引て
26 栖燕掠東軒
27 含露花無語
28 雨そゝきして暮る春の日
29 別淚多余滴
30 いつしか立し中の秋風
31 そよや今草のかげ野の虫鳴て
32 あな物さびし古跡の月
33 廢宅烟先絶
34 弁河水已渾
35 沈るやをもきが上の罪ならん
36 度生両足尊
37 臘梅勞帶雪
38 人こそ見えね山あひの道
39 流声呼渴驥
40 計口識哀猿
41 なきをこふ夕は袖も沾て
42 さすや日おりも落雲の色

43 杖郷亭七十
 44 おもひやるにも道遥なり
 45 つらねんも及ばぬ和歌のうらみして
 46 軽浮藻与蒨
 47 かげみれば底にぞ植し菊の水
 48 月明彭沢門
 49 野僧唯宿露
 50 あるに任する世こそ安けれ
 51 踏そめし心はつらき恋路にて
 52 人わらはれの身とやなりなん
 53 鬢天年暮雪
 54 かぐみの前にうとふ一ふし
 55 山近く志賀の浦舟漕うけて
 56 古松密固根
 57 何林鵲彷彿
 58 此夕兔嬋媛
 59 しづかなる軒の下露たえぐに
 60 人かとさけば萩の葉のをと
 61 詩峰先称意
 62 仁沢普酬恩
 63 捨てゝこそ哀は残る命なれ
 64 生田の川の水のうたかた
 65 胸雨無從涙
 66 夜半にはいとゞあこがるゝ袖
 67 まどろめば夢の中にも花散て
 68 始梅廿四番

69 洪鈞春欲遍
 70 良策竈攸屯
 71 うつしみる塩路は遠し血家の浦
 72 かげはならべる月の海づら
 73 夕闇の空になくゝ雁の来て
 74 荒莎露転繁
 75 些閑雲不動
 76 やゝ吹すさぶ外のやまかぜ
 77 時しらでまださへ残る富士の雪
 78 霞埋五丈原
 79 覚猶春草夢
 80 桜にやどをかりふしの袖
 81 行めぐる交野の道の暮初て
 82 衰老凍鷗蹲
 83 嵐乍触樵笠
 84 台高吹雅埧
 85 久方の空清のぼる月更て
 86 夜寒やうしと帰るつり舟
 87 秋江楓晒錦
 88 かげも入日をあらふ白浪
 89 振鷺知風惡
 90 獲麟攸道存
 91 さらに今君が心のくからで
 92 いひことわるに恨のこらずぬ
 93 又約合歆再
 94 かはすあふぎぞしるべとはなる

95 夢人の伝へ忘れぬ舞の袖
96 楽府惜黄昏
97 風刀折花手
98 松はみどりの立まさる陰
99 幾春をふる巢の鶴の声すらん
100 以賀歳三元

《三》

漢和 第三

1 旧枝花又落
2 春のわかれをしたふ年ぐ
3 鳴渡る燕に雁も声そへて
4 渺茫乎碧天
5 望郷雲一片
6 夜深き月にさそはるゝ船
7 音もやゝ迫門の秋風しづまりて
8 迎潮使岸湍
9 梧檐無暴雨
10 夕露もろき竹の葉伝へ
11 ねどころを定めぬ鳥や羽吹らん
12 長笛遠村辺
13 老去同参杖
14 いさめにおもふおやの憐
15 理もふかき仏のちかひにて

16 誦籌忽忘筌
17 月我寒哦友
18 うたゝかたしく夜半の狹筵
19 うき事を夢になせとの恨して
20 蝶飛栩栩然
21 風流河上柳
22 音も霞によする漣
23 鐘遠き長等の山の日暮て
24 旅衣蔽履穿
25 路難関百二
26 宵隻歳三千
27 おもひあらばよしや何せん関の月
28 露きえ残る身をぞ恨
29 鳴秋蛩草裏
30 賑市蟹桑顛
31 里人もむれつゝ急ぐ影見えて
32 俄に雨はふるの小山田
33 微風吹太野
34 浅水出深泉
35 そことなく森の下道分入て
36 たが懸置し神の白木綿
37 恨重望夫石
38 あかぬ別やうき夕烟
39 物のけのしうねかりしは去やらで
40 偽朝言不全
41 聴奇堯諫鼓

42 奏得舜薰絃
 43 影冷空山月
 44 雪間^{ユキマ}におちてゆく早瀬川
 45 さび鮎^{アサギ}や流る水にまかすらん
 46 海若更鉤玄
 47 衣での雪に成までたゝずみて
 48 花ちる影をいかで還^{マゼ}
 49 鳥のねも霞に残る春の庭
 50 遊糸断又連
 51 風かはる空より雨のそゝきゝて
 52 浸緑半池蓮
 53 遠陸無塵盧
 54 まことの道に入ぞ賢^{サキ}
 55 いはけなきをしらぬ戸口のしるべにて
 56 染心紅葉緑
 57 秋深蓉臥水
 58 浪のよるく月円^リ
 59 等閑に行舟あやし清見潟
 60 霧埋富士巔
 61 山根雲秀処
 62 京柿竈屯阡
 63 かく計ふりにし跡と成はうし
 64 曠野草芊々
 65 路遠塵之日
 66 たが袖ならし駒に鞭^{ムチ}
 67 さしとめてよばふ声聞渡舟

68 牌掛鄂湖前
 69 嵐乍疑山動
 70 うかべる雲のをくれ先^ツ
 71 常ならぬ身のはかなさを思ひ歎^{ウレ}
 72 結交飲八仙
 73 西簾高捲月
 74 秋のあはれもさぞな小軒
 75 野の宮や別れの袖を悲て
 76 衰顔抛玉鈿
 77 送春花昨日
 78 梅が香うつす道のべの荃
 79 をく露の白を雪の名残にて
 80 開牖賦詩篇
 81 横雲の空ほのくゝと明る夜に
 82 あとまでしたふやま杜鵑
 83 さらに又馴し都を思ひ出て
 84 うさいか計遠き左遷
 85 名珪多美誉
 86 孤枕対愁眠
 87 さりとともと待夜やいたく更ぬらん
 88 かたぶく軒に月は懸^ツ
 89 誰なれば浅茅が中に擣砧
 90 楚岸霧相纏
 91 半棹劳波惡
 92 三旌撓国権
 93 雞冠時以礼

94 匂ひもふかき袖の員／＼
95 一木づゝふるれば花に摺衣
96 温籍杏嬋娟
97 夕霞きえて家路や近からし
98 江左聳山肩
99 広徳人懷恵
100 おこらぬ世をやなをも扇

《四》

和漢
第四

1 忘るゝは声のうちなり郭公
2 月残緑樹陰
3 西楼涼宇宙
4 隙もとめ入軒のしたかぜ
5 呉竹の雪の零の絶／＼に
6 閑身徒促吟
7 与清湖境友
8 釣する袖も帰るさのみち
9 暮ぬれば真砂の上も塩満て
10 むれゐし田鶴の鳴渡るそら
11 老松経幾歳
12 积種到而今
13 鐘一知何処
14 まれにあふ夜の暁はうし

15 忍ぶれば猶あやにくに月澄て
16 秋高憶藁砧
17 野堂虫四壁
18 しほれはてたる草村の色
19 タぐれはむべ山風に花散て
20 流霞相共斟
21 蝶児翻舞袖
22 鰥寡苦愁襟
23 後箭涙河底
24 あとやながらの橋となるらん
25 しゝめの雲引すつる志賀の山
26 月をへだつる雁の一行
27 景冷孤村北
28 霧晴漁浦南
29 古帆風所転
30 あれたる浪の上はるかなり
31 卯花の垣ほかたぶく山かけて
32 洞戸白雲深
33 侘つゝも焼や真柴の夕煙
34 何とかにへん^{たか}さゆる夜の雪
35 容槁短蓑鷺
36 あらし吹しく末の蘆原
37 大伴のうらかなしげに秋くれて
38 閑月落波心
39 情薄班姬扇
40 残るはいつの袖のうつり香

- 41 紅露被花染
 42 糸烟如竹紅（紅）
 43 朝ぼらけ春のながめの遠き江に
 44 舟こぎ出てうたふ浦人
 45 風波鷗欲立
 46 かくからき世にまじはるはうし
 47 玉の緒や物おもへとのすぢならん
 48 しのお心のよほり行すゑ
 49 双渡（渡）恨唯一
 50 同胞笑是三
 51 竹橋風緩度
 52 くれし川辺に螢飛かげ
 53 遥なる蘆屋の灘の道とめて
 54 郊外木森々
 55 名秀読書草
 56 身のいたづらに過る果々
 57 いつまでか直隠のうき思ひ
 58 漆盟約臂金
 59 衣寒勞永夜
 60 ね覚おどろく秋風の声
 61 月ならで誰かは問む松の門
 62 雲収対故岑
 63 池明天碧落
 64 かつぐ見えし浪のうき草
 65 五月雨に深田の早苗水越て
 66 連夜蜀魂音
 67 眠美珊瑚枕
 68 妝濃玳瑁簪
 69 面影の似たるをみるもなつかしみ
 70 おもふが中の子はあはれなり
 71 折ぐに大井のやどり問よりて
 72 河世幾千尋
 73 裊載扁舟月
 74 夕霧さえてあなし吹空
 75 爽氣無青顧
 76 散て木の葉のかさなれる道
 77 夏山や花より後の晴（晴）からん
 78 欣逢（早）則霖
 79 村烟埋旧宅
 80 水一筋の遠きすゑぐ
 81 引咤る浪の小舟の綱手縄
 82 両鬢雪相侵
 83 虚左隻床上
 84 みつがぬ夢の名残はかなき
 85 相像程は雲井の夜半の月
 86 律声写素琴
 87 秋蟬唯泣露
 88 野鹿又依林
 89 所ぐ枯し浅茅のそよめきて
 90 照日もくるゝ山陰のみち
 91 乍嵐雪片々
 92 しきりに雨のすさび来る空

93 ゆふはらへすまの浦浪立かへり
 94 岸花影已沈
 95 開春梅障子
 96 しのに霞のとをる山窓
 97 雛鶯声試得
 98 今年生そふ園のむら竹
 99 夏草や更にかるとも見えざらん
 100 石逕水輕淋

《五》

漢和 第五

1 吟二杜鵑雨
 2 夏来にけりと散山桜
 3 我宿の園の卯花咲初て
 4 窓外月分明
 5 薄霧風吹送
 6 秋なりけりな浪の声^ナ
 7 蜚のす^む浦半の夕身にしみて
 8 沙際路縦横
 9 群玉鷺千点
 10 田面の原の雪は晴けり
 11 呉竹の林がくれは明やらで
 12 灯残一短檠
 13 深閨心不遠

14 独処恨無平
 15 つく^くとながめくらせる春の日に
 16 やどり忘れずかへる鶯
 17 嵐使奏花落
 18 野もうらがれて秋や更けん
 19 夕霧に時雨て月は小倉山
 20 銀河到曉清
 21 泣糸琴牧子
 22 出ていにしはこころ輕^ナ
 23 捨て世のいづくか安き住処
 24 一釣換三旌
 25 鱗浪疑魚躍
 26 鷗風奈鳥驚
 27 木の間もる雨や落葉に交るらん
 28 尾上の雲に月傾^ス
 29 冷しく鐘こそひゞけ初瀬山
 30 郊墟秋此迎
 31 星々鬢^髻両鬢
 32 猶袖ぬらすおもひとぞなる^成
 33 余所に立浪も高師の浦悲し
 34 故里幾長程
 35 石路多鞋苦
 36 かげはしげみの山の崢嶸^サ
 37 潭底青如染
 38 炉中白可烹
 39 日衰霜後草

40 くるれば虫の侘つゝぞ鳴
 41 旅となるを待とせしまに秋去て
 42 張翰更思羹
 43 月自無心出
 44 あとより袖をかへすやま颯
 45 花の香のふり捨がたき鈴鹿川
 46 堪挙断岸檉
 47 春光霞一簇
 48 あるかなきかに残る蜻
 49 暮かゝる小野のほそ道たどくし
 50 とふにあはれもふ「欠」き古塋
 51 都出るかぎり今はの左遷に
 52 菅氏得虚名
 53 幻夢縦醒亦
 54 世につれなきはうき人情
 55 鬼神もやはらぐ物を和歌
 56 正音雅楽笙
 57 高楼雲仮道
 58 残臘颯飛霰
 59 来ぬ春を先告がほに梅咲て
 60 あるじはたそやかゝる蓬生
 61 人ならばむかしをとほむ秋の月
 62 刑官又象兵
 63 愁雲胸有霧
 64 一つの夕かまくら并
 65 荒草悴村路

66 偃松掩暑棚
 67 しづかなる眠をさそふ風立て
 68 浪に鷗のわかれてぞ行
 69 小舟漕藤江の浦の朝ぼらけ
 70 少焉日掛鉦
 71 孤山猶聞爾
 72 荇人たえて残るいな茎
 73 道のべの夕影深し秋の霜
 74 弄月識天盈
 75 花湿池中樹
 76 若葉にしづむ水の萍
 77 うすらひもとけし流に鳴蛙
 78 溪腰被靄縈
 79 望之仙洞遠
 80 しばしが程の囲碁の争
 81 灯の影なつかしく忍ぶ夜に
 82 入夢彼長庚
 83 又近捲荷畔
 84 仄聴伐木丁
 85 棧に山口しるき道見えて
 86 雲にのぼれば遠き葛城
 87 落日唯招月
 88 尾花が袖の露の白瑛
 89 且去悲秋蟀
 90 緩縦報暮鯨
 91 よしあるは行人の住家にて

92 深山がくれや水も澄らん
93 暖雪看無跡
94 かつあらはるゝ野べの下萌
95 吹たえて荻に伝へよ花の風
96 願言封弟兄
97 後見をたゞたらちねの名残にて
98 消災如律令
99 南朝安北狄
100 つぎもて来ての家ぞ栄^ル

《六》

和漢 第六

1 写すともえやはにほてる秋の月
2 払霧五更風
3 微雨皆成露
4 早苗みだるゝ小田の末^ド
5 門近き一村竹のそよめきて
6 黄昏西又東
7 山間雲得路
8 瀧のひゞきも遠き川上
9 さし留し流はよどむ高瀬舟
10 卸簾昇碧空
11 幽禽何処去
12 まだ明はてぬ木がくれの里

13 鐘の声おりある雲に埋れて
14 湘月楚人弓
15 野水猶清冷
16 けしきもかはるやま風の末
17 破竈烟無跡
18 還郷節有忠
19 逢宵情語尽
20 しみて恨んことはりもいさ
21 あだし身にくらべば花は数ならで
22 かつ咲残る軒のつま梨
23 暖雲催細雨
24 略釣掛長虹
25 大宮の内にわかつてる道ありて
26 たゝるてふ名やよくる神垣
27 惟天青不改
28 其石黒応攻
29 雹玉廻珠転
30 小篠に風のすさぶ明ぼの
31 起ゆけば猪名野の月の影澄て
32 助予嘆息虫
33 恩遭胸霧隔
34 余所のたよりに問しはかなさ
35 夕影^影のやどりも哀身の果し
36 しげれる陰にこもる草ぶき
37 つれ^レは絶ぬながめの音聞て
38 衰残陸放翁

39 昨非吾既醉
 40 うしやねられぬ暁の空
 41 山鴉霜夜を寒み鳴立て
 42 何故月朦朧
 43 再覧花尤物
 44 空しく過し春は幾年
 45 めされんも遠き県やもれつらん
 46 千辛伎已窮
 47 つゝめども色におもひの顕て
 48 松はとしたふ人のことは
 49 双枕此良夜
 50 五絃又少宮
 51 蟬声鳴夏去
 52 ゐれば冷しき山あひの袖
 53 室の戸の夕日も暗く成て来て
 54 如何新府洪
 55 市人無緩歩
 56 甲第有全功
 57 虎臥訝^(班カ)班石
 58 物はかなしやあだしの^露露
 59 露ごとの月もかりなる宿りにて
 60 寸莛又答楓
 61 誰家礎断続
 62 里はまだきに暮るゝ山本
 63 末はたゞ霞につゞく水無瀬川
 64 道こそこのれ雪のひまどく

65 春魁花第一
 66 今朝立そむる風しづかなり
 67 旅衣はるけき浪に舟出して
 68 雲外是寰中
 69 鰥寡生無故
 70 こゝらの盟かけ置し人
 71 添ぶしや只しばらくの程ならん
 72 跡かりつむる鳥のおち草
 73 疲筇随我僕
 74 越格打爺童
 75 游学多出^生睡
 76 かゝ捨たる夜半の灯
 77 高窓先得月
 78 うつろふ櫺の梢さびしき
 79 鴉の鳴片山隠風おちて
 80 漁夫掀短篷
 81 行年吁老矣
 82 ゆるされつゝも乗し輦
 83 おしむこそ今は時の別なれ
 84 弹琶恨画工
 85 蹇驢鞭幾度
 86 雲白妙のおちこちの嶺
 87 葛城や高まの花に明初て
 88 回首同帰鴻
 89 風自春消息
 90 秋のひかりの影うつり来て

91 稻妻やさそひ出らん空の月
 92 重九雨声濃
 93 染露薔薇紫
 94 映^照揮^ニ荀^カ茱紅
 95 まふのぼる御階のもとや只しばし
 96 国のさとしを告るあやしき
 97 風前雲擾^擾ヒ^カ
 98 けぶりも消てほそきあくた火
 99 家くも浪より明る浦づたひ
 100 鬱然十八公

《七》

漢和 第七

1 詠一月千里
 2 雁つげわたる夕暮の秋
 3 蘆原や稲葉の穂末戦来て
 4 前村宿雨収
 5 山従平処嶮
 6 雲にいざよふ日は幽^リ
 7 遠近の空も閑に鐘鳴て
 8 相連多少楼
 9 栄廻佳境路
 10 松のほとりに立ぞ休らふ
 11 山賤の袖に涼しき暮待て

12 知誰一曲謳
 13 秋来風又急
 14 こぼれてあとの露の村萩
 15 月になる野路の玉川浪かけて
 16 避塵箇白鷗
 17 回瓢天下窄
 18 艶鏡世間尤
 19 待夜欣遭遇
 20 かはるちぎりのならはしは憂
 21 散ば咲花ならぬ身の驚て
 22 霞もふかき住家求^ル
 23 山陰に声して鳥の立帰り
 24 人而抱子猴
 25 雲無心蔽月
 26 たえくきゆる浪の薄霧
 27 朝朗吹や明石の秋の風
 28 請退憶同遊
 29 話旧松椿友
 30 惜陰李杜儔
 31 そごろなる心や酔のうちらん
 32 よるべもなみのあら海の舟
 33 目之湘景遠^{前カ}
 34 やは一筆に書もとゞめん
 35 馴そめて此儘ならん恋もうし
 36 生怕辟陽侯
 37 欲雨雲先度

38 越ん行衛もくるゝ片丘
 39 おくれしも草かり笛をしるべにて
 40 甚癯老特牛
 41 漢風吹不斷
 42 郵月看無由
 43 瀬の声も物冷しく落て来て
 44 かつ／＼水に木葉流ル、
 45 春ちかみ下解ぬらし峰の雪
 46 式微王子猷
 47 破窓風驟至
 48 科斗道焉瘦
 49 措散花無頼
 50 ねもせでくらすけふの日脩ナ脩ガサ
 51 香閨窺者蝶
 52 朱泚集而蜉
 53 たゞすこそ上りての世の掟なれ
 54 かりのつかひのめぐる州ぐ
 55 大淀の浦も遙に隔りて
 56 懶涯寄思不
 57 茜裙徧染意
 58 今はとわびて枕をぞ培トル
拾カ
 59 宵更てうしや傾秋の月
 60 点滴落梧楸
 61 小扇推残暑
 62 一聯出御溝
 63 つゝしむも下やすからぬ思にて

64 いかに涙の袖に浮ルべル
 65 言の葉もながくといはふ旅よそひ
 66 先生離此郵
 67 晚溪禽伏窠
 68 をともしきりに高き山颯颯カ
 69 水の上はいさしら浪の花の瀧
 70 柳絮走毛毬
 71 湿問南昌故
 72 剎那北屈婁
 73 時を
 74 終に光をあらはせし球
 75 夕露にしばらく月を待とりて
 76 むしの鳴音や何を愁ル
 77 咸眺秋末草
 78 以実道旁榴
 79 皎々白唯雪
 80 春おぼめかす今朝の栗鸕
 81 霞さへまた面影に立田山ツエ
 82 うごくや風の青柳の末薺
 83 惜緒継其志
 84 言綸微彼瘤
 85 うらやむはさぞある人の縁シにて
 86 翁四共安劉
 87 松自長生樹
 88 塩の干潟の遠き流洲
 89 霧間より沖行舟のあらはれて

90 月斜掛玉鉤
91 鶉衣輕侶羽
92 かくおとろふるはては羞し
93 おもひにや我身も影と成ぬらん
94 夢醒撫枕頭
95 狂風帆片々
96 ひかれてともに行水の漣
97 夕立につもりてちりや芥川
98 緑陰更好逵
99 園丁花飽弄
100 春のながめも明ぼのは猶

《八》

和漢 第八

1 染かねて夕日をまつの時雨哉
2 少焉月一欄
3 秋天雲淡泊
4 山もほのかにうたぶ^か海づら
5 遠島を奥漕舟のしるべにて
6 帰歟行路難
7 苔唯岩下草
8 霜の雫のたえぐの音
9 朝鳥のをのがねぐらを羽吹出て
10 故村回首看

11 遠林知孰樹
12 しばしは残るひぐらしの声
13 暑をも忘ん月の秋立て
14 如瘦此西轡
15 司馬過詩路
16 あはれのそふる水茎の跡
17 今更に兼てみし夜の夢語
18 深閨灯僅残
19 応鐘無暖響
20 野中にひとり枕かるくれ
21 帰らぬをかつはかなしめ花の雨
22 送春小牡丹
23 遊糸牽戲蝶
24 舞袖転回鸞
25 よそほひも豊の明のたゞならで
26 寄思蘇若蘭
27 愁懷添忍淚
28 床はなれつゝ出るあはれさ
29 声ぐに鳴たつ沢の夕間暮
30 千鳥もさはぐ小田の秋風
31 古山新者月
32 焼火ほめく森の木隠
33 宮人の打しはぶくも上久て
34 礼云章甫冠
35 興佳悲落日
36 かへらんかたもおもほえぬ道

37 かはせしは夢やうつゝの枕にて
 38 よそにさきだつ名こそ惜けれ
 39 雨雲に今宵の月や遅からん
 40 心清承露盤
 41 乍嵐蕉又恐
 42 乃土杜頻酸
 43 道のべも暮にけらしな三輪の山
 44 佐野のわたりの雪になる空
 45 敲氷人袖手
 46 悟道我銘肝
 47 風物花微笑
 48 かれし中にも若草の原
 49 春浅き麓に出て鳴雉子
 50 晚霞満夜漫
 51 鳥辺野や終には同じ身の後
 52 焼尽紫梅^梅檀
 53 是玉繞檐滴
 54 とだへてや又霰ふるらし
 55 吹風に正木のかづら色見えて
 56 肌冷望長安
 57 遍照多情月
 58 おとしめらるゝみづからぞうき
 59 ぬぎかへぬみどりの衣恨して
 60 苛政諫無官
 61 閑半雲秦嶺
 62 激来波楚灘

63 松風に猶川風も声添て
 64 琴のしらべもつれぐゝの宿
 65 遠朋其志近
 66 をくれしとてや入し奥山
 67 秋もはや末野の鹿の音を絶て
 68 泣露草千般
 69 素節従霜識
 70 かげになり行月の下道
 71 汲袖も曉ちかく起出て
 72 こるやしほ木のひまなかるらん
 73 寸心劳尺宅
 74 一子苦三寒
 75 世与浮雲変
 76 きふの花をみねの俤
 77 明ぼのゝ空もみどりに弥生山
 78 牆陰春雪乾
 79 水烟迷翡翠
 80 堀江の波の暮そむる声
 81 はるぐゝとよせては留る松浦舟
 82 橋梓更雲端
 83 金鏡侵銀髮
 84 おもへばうさのそふ後の親
 85 住吉やならはぬ道を求来て
 86 ひろひていざや恋忘れ貝
 87 沙盟鴛両々
 88 晚眺兔団々

89 桐の葉のつもるも安き日数にて
 90 感秋衰随潘
 91 封公唇吻重
 92 あかれの袖(あし)の声あまた也
 93 暮て猶さし入ふかし高(せう)の門
 94 龍松陸地蟠
 95 青陽花喜色
 96 去年のあらしの吹しほる山
 97 朝まだき霞にむせぶ音羽川
 98 羈旅杖盤桓
 99 もとみつる里はあら野の原にして
 100 生民仰可汗

《九》

漢和 第九
 1 雪堆山万壑
 2 松のひゞきもさゆるあけ方
 3 玉簾まきの戸口の月澄て
 4 横空雁一行
 5 又逢秋瞬息
 6 さへし跡よりむすぶ露霜
 7 人帰る麓の原のくるゝ野に
 8 浅水繞池塘
 9 輕動数竿竹

10 はしゐにふかすそでの涼サ
 11 影は只雲路に高く飛螢
 12 絶学胤詩囊
 13 八景惱情七
 14 ほのかにつぐる鐘は入相
 15 不語花留履
 16 芝生におちて残る梅が香
 17 古宮の跡とふ春の夕あらし
 18 感月白頭郎
 19 猿叫驚蕉鹿
 20 蟬枯聴草螢
 21 うきやなど我身ひとつに積らん
 22 わすれぬるをばともに忘り
 23 かこたずはさのみかこたんよしもなし
 24 比翼願尋常
 25 天事陰晴日
 26 時雨をおくる北の山麿
 27 夕されば賀茂の川波音添て
 28 曠野路茫々
 29 幽館有人否
 30 禁闌即位昌
 31 憐のふかきやゆるす科ならん
 32 たゞたのめとぞ説法の間
 33 清曉月斜落
 34 うき古のわすられぬ商
 35 露けさは今も別れの袖の上

36 韓朋終化鶯
 37 漁童先近水
 38 住こし浦の浪や荒_{ラン}
 39 雨風の気色もやまづかみなりて
 40 行雲送夕陽
 41 恣吹牛背笛
 42 以振兔毫鋌
 43 蔽碣無名草
 44 つむにしほれてうき花筐
 45 やゝ暮る春野の露を分ならし
 46 何処喚山梁
 47 谷せばみ峰もひとつに雲こりて
 48 爽氣断愁腸
 49 すみ渡る色も身にしむ空の月
 50 思ひながらもあはれ夜長き
 51 鳥鐘を別れし後の名残にて
 52 盜裘秦孟嘗
 53 大刀軍訝敗
 54 駒引とゞむみちの傍
 55 影くれしひのくま川やくらからん
 56 半閑旧草堂
 57 おもへどもえも捨はてぬ心にて
 58 手はふれけらし返す玉章
 59 何人和月立
 60 唯我向秋傷
 61 真葛葉に声して風やさはぐらん

62 影冷しき水茎の岡
 63 近聴笠檐雨
 64 緩廻金殿廊
 65 吟中雲去此
 66 智外却_却無量
 67 心たゞかよふや西の空ならし
 68 いりて見ばやとしたふ唐
 69 三吉野やよしのゝ奥の道とめて
 70 嫦娥余寵光
 71 竟衰先設菊
 72 こぼれにけりな露の草牆
 73 秋ちかき庵に鹿の子立馴て
 74 弓令石鞏張_張
 75 声連絃_廿五
 76 うらより遠の浦つたふ航
 77 比良のねの花や夕を残すらん
 78 輕開紅海棠
 79 負暄春睡足
 80 迷暗斗瞻印
 81 疑路不行尽
 82 こととふ人も今さらに亡
 83 水の江や跡は煙に隔りて
 84 兼葭青已黄
 85 露遭風手掃
 86 霧間に月の影ぞ彰
 87 茅店吁堪愧

88 かゝる住居もあはれ故郷
89 見そめしはいとはしたなき面影に

90 眉濃抹淡妝

91 朝ぼらけまだ消残山かづら

92 なびけばしろき雪のむら篁

93 龜布漏膚粟

94 うしや侘しやかり臥の床

95 相坂や行衛いかにと想像

96 花後慕東皇

97 御狩せし袖は霞にくれ初て

98 佳節狗猪羊

99 寒去春来也
100 数をかさねてすゝむ觴

《十》

倭漢 第十

1 薄雪もながるゝ水の^{うか}かき藻哉

2 暖信臘天春

3 風乍過牆去

4 秋の胡蝶のみだれ行すゑ

5 打出る野は明渡る露の色

6 外光月一輪

7 化生雲幾度

8 山又やまやはるかなりけん

9 さきたつををくれし道のしるべにて

10 帰鴉落日辰

11 林烟焼者葉

12 ひゞきやうしととづる松の戸

13 うたゝねの枕におしき夢絶て

14 通宵痛妾身

15 月みれば心やうはの空ならん

16 秋風顫葛巾

17 貯愁籠蟋蟀

18 致賀石麒麟

19 出なんと思ひとりても残る世に
20 つれづれながらたへて山^{下上}住

21 告やらばこてふに似たり花盛

22 好朋梅主人

23 清明唯雨暗

24 寒苦是霜辛

25 哀にもつがはぬ鴛の音に鳴て
26 ふるきふすまの下臥はうし

27 愛尚閨中月

28 うつろひはてし庭の紅葉ゝ

29 舞人のかざしに手折菊の枝

30 誰愆鬢已銀

31 踏之山一路

32 岩ねひそかに水くづる音

33 春浅き^梅路の氷柱解初て

34 花笑点紅唇

35 欲立危巢燕
36 まやの軒もる月のたび／＼
37 簾のもとに雪にしるし雨そゝき
38 長吟眉自顰
39 僧敲鐘半夜
40 月おつる江にとめし舟人
41 真野の浦や尾花も浪のまがひにて
42 丁当砧又頻
43 夕暮やかならずうきをすゝむらん
44 とはぬをいかで待はならひし
45 忘らるゝ身をこりずまのかた思
46 万事総無真
47 竹動涼時節
48 蓮沾露早晨
49 池浪のよする方より濁りきて
50 躍深六々鱗
51 壊宮留片瓦
52 声して人は見えぬ山陰
53 暮ぬれば遠き田面に引なるこ
54 玉兔月精神
55 郊野霧横処
56 おもへばかなしいにしへの跡
57 数／＼の文もはかなく焼捨て
58 晤語接重茵
59 賤被画屏隔
60 学令灯火親

61 潔心君子水
62 あらふべき日を待し黒髪
63 穢にふるゝ程は宿りに籠居て
64 その事となく物おもふ袖
65 ぬれば夢覚ればかこつ幻／＼に
66 愧是奈窮貧
67 遮径荒村草
68 たえ／＼風のわたる棚はし
69 霜白き田中の月の小夜更て
70 傷心茅舍民
71 金城終弃土
72 砂漠幾飛塵
73 短杖輕行履
74 おちくる雨の足引の山
75 川音やむなしき谷にうたふらん
76 脱機瀑布紳
77 一筋の雲さへ花の形見にて
78 又ふきをくる春風の跡
79 またれつる秋な忘そ帰雁
80 日春湘水浜
81 高低峰次第
82 規矩国平均
83 守捨し関のこなたの道有て
84 忍びかよひもつもの宵／＼
85 あふな／＼月は思はん我思
86 双星又前因

- 87 秋 冷 豊 其 薈
 88 暴風のかぜの物すこき暮
 89 想像こ萩がもとよいかならん
 90 茂りにつゞく草の陰みち
 91 遊 戯 陶 尋 岳
 92 粒 団 孔 問 津
 93 流木によるべも浪の行衛にて
 94 下す筏や水のしがらみ
 95 造 顛 勞 濟 世
 96 将 相 欲 朝 宸
 97 花 謝 皇 風 緩
 98 園生になるゝ鳥の囀り
 99 春の日やいたらぬ隅もあらざらん
 100 洪 名 太 度 仁

【校異】

- 《二》 53 年—歳 63 捨てゝこそ—捨てゝそ 97 刀—力
 《三》 5 郷—卿
 《四》 41 被—破 42 紅—絳 69 底本は 68 ↓ 70 ∷ 78 ↓ 69 ↓ 79 の順
 に句を記し、補入記号によって 69 句をこの位置に挿入す
 る。対校本は句順どおりに記す。
 《五》 50 ふ「欠」き—ふかき 51 かきり—かたり
 《六》 57 班—斑
 《八》 93 高の—寺の
 《十》 67 径—往 72 塵—鹿

(よう こんほう・武蔵野大学文学部講師)
 (なかむら たけし・大和大学教育学部講師)